

「4つの数字」の魔力

——リカード貿易理論の新展開¹——

田 淵 太 一²

- I はじめに
- II 「4つの数字」の誤った解釈を正す——R. ラフィン, A. マネスキ, 行沢健三
- III 「4つの数字」の議論に囚われずリカードの著作全体から貿易理論を把握する——G. ファッカレロ
- IV 「4つの数字」への囚われが J. S. ミルを需要供給価値説への転回に追い込んだ——塩沢由典
- V 経済学史理解のための新たな座標軸——「ab ovo の構成」vs 過程分析
- VI むすびにかえて

I はじめに

ポール・サミュエルソンは、1968年の国際経済学会会長講演で次のように語った。かつて数学者ウラムから「全社会科学のなかで、真実であり、かつノン・トリビアル（有意味）な命題をひとつ挙げよ」と問われて、ようやくたどりついた答えがリカードの「比較優位の原理」であった、と（Samuelson [1969] 1972: 683, 訳：357）。サミュエルソンは別のところで、『比較優位の原理』は学派を問わずすべての経済学者が理解しかつ賛成してきた不滅の（statical）論理であると断じた（Samuelson [1976] 1979: 649）。

たしかに、デイヴィッド・リカードがその主著『経済学および課税の原理』（以下、『原理』と略称）第7章「外国貿易について」において「比較優位の原理」を提示したとされる数段落は、アダム・スミスが『諸国民の富』で「見えざる手」に言及した箇所などと並んで、経済学史上もっとも有名な一節であろう。そこでリカードが用いた数値例をサミュエルソンはいみじくも「4つの魔法の数字（his four magic numbers）」と名づけた（Samuelson [1969] 1972: 678, 訳：349）。しかしながら、この「4つの数字」は

-
- 1 本稿は日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C）21K01417）による研究成果の一部である。本稿作成にあたって塩沢由典・大阪市立大学名誉教授より貴重なご教示をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。
 - 2 本稿は、2022年6月10日に ESHET（the European Society for the History of Economic Thought）イタリア・パドヴァ大会において報告した論文（Tabuchi 2022）の内容の一部を再構成して利用している。当学会の会場となったパドヴァ大学は世界最古のボローニャ大学に次いでイタリアでは2番目に古い大学で、奇しくも本年に800周年を迎えたとのことである（1222年創立）。教壇に立った歴代教授にはダンテやガリレオ・ガリレイもいたという。ガリレオ・ガリレイが教授に就任したのは創立370周年を超えてからであった。
 - 3 生産性が高い国の賃金は高く生産性が低い国の賃金は低いことを現実の貿易状況のなかで説明するの

まるで魔力でももっているかのように理論家を魅きつけて長きにわたって呪縛し、貿易理論の進展を阻害してきたと言ってよい。リカードの死後、ジェームズおよびジョン・スチュアート・ミル父子によって変型された貿易理論は、その後長らく、「4つの数字」に象徴される枠組み、すなわち2国2財モデルにもとづく「比較優位の原理」と「相互需要説」という伝統に縛られ、経済学のなかでも進歩の乏しい分野であり続けた⁴。今日に至るまでテキストブックのなかで慣習的に反覆されてきた「リカード・モデル」とは要するに、生産要素が労働のみの1要素経済を想定し、2国2財の枠組みにおいて、貿易前（自給自足）の状況における両国の労働の存在量と労働投入係数が与えられれば、貿易開始後、「比較優位の原理」により貿易パターンが決定され、「相互需要」（需要・供給）によって交易条件と貿易利益の配分が決定されるという J. S. ミルが提示した理論に、誤って「リカード」の名称を冠したものである⁵。

国際的にみてこの「リカード・モデル」という固定観念が覆されはじめたのは最近20年ほどのことにすぎない。その後、研究の急進展に伴って、「4つの数字」をめぐるリカード貿易理論が歪められたことが経済学全体の進路にも影響を与えたのではないかという課題も浮上してきた。

本稿で物語ろうとするのは、200年にわたって形づくられてきた「4つの数字」をめぐる伝統的解釈がいかに乗り越えられたかについての研究史である⁶。近年、国内外で展開されたリカード貿易理論研究のめざましい進展とは、つまるところ、「4つの数字」の魔法をとき、その呪縛から脱却する営為であった。論争の一参加者としての証言もまじえつつ、研究の動向を概説したい。

ㄨ、であれば、そこには何ら不思議な点はない。同じ内容がノン・トリビアルな命題と錯覚されるのは、視点の転換を行うからである。まず貿易前のアウトルキー状況を設定し、両国の労働の存在量に加えて「4つの数字」（両国の労働投入係数）のみを与件として明示したうえで、相対賃金率の調整を背後に隠しながら、貿易パターンの決定を説明する。「比較優位の原理」を教壇で学生に説明する際に誰もが多少は自覚することであろうが、「4つの魔法の数字」の設例を用いて「どんなに生産性の高い国でも輸入する財がありどんなに生産性が低い国でも輸出する財がある」と説明するのは、ある種のマジック（手品）なのである（田淵2006: 2, 15を参照）。

4 多数国多数財の貿易モデルに道を開いたフランク・グレームはこの伝統を「死手財産」（相続後の変更処分が許されない財産）という卓抜な比喩で表現した。「おそらく経済学の他のどの分野と比べても、国際価値の理論ははなはだしい死手譲渡（mortain）の対象となっている。この死手財産は主として J. S. ミルから来ている」（Graham 1948: 27）。

5 正確を期して付言すれば、J. S. ミルの理論内容に機会費用価値説にもとづく生産可能性フロンティア（代替曲線）という現代的な形式を与えたのはハーバラーであった。これについては後述。

6 本稿はまた、同志社大学商学部創立100周年の機会に、本学着任後に執筆した田淵（2010）以来12年間にわたる自らの研究の進展を示す中間報告として執筆したものである。リカードとミル父子という同じ題材を扱ってはいるものの、「4つの数字」の真の意味の部分以外はほとんどすべてその後の研究で得られた成果であり、また共通する部分も理解が大幅に更新されている。

II 「4つの数字」の誤った解釈を正す⁷ ——R. ラフィン, A. マネスキ, 行沢健三

「4つの魔法の数字」

リカードが『原理』第7章で「比較優位の原理」を提示したとされる部分は狭義には5つのパラグラフと1つの長い注からなる。以下に訳文を掲げ、便宜のため番号を付す。

- [1] ポルトガルは現実にはワイン生産に自国の資本と労働の大きな割合を充てており、そのワインでもって外国産のクロスや金物類を購入しているのであるが、仮にポルトガルが諸外国と通商関係をもたないとすれば、この資本の一部をこれら諸商品の製造に充てざるをえず、こうして得られる諸商品はおそらく数量が少ないばかりでなく品質も劣るであろう。
- [2] ポルトガルがイングランドのクロスと交換に与えるワインの数量（**The quantity of wine which she shall give in exchange for the cloth of England**）は、各々の生産に充てられる労働量によって決定されるものではない。もし両商品がともにイングランドまたはポルトガルで製造されたなら、それぞれの労働量によって決定されるのであるが。
- [3] イングランドが、クロス（**the cloth**）を生産するのに年間100人の労働を要し、もしワイン（**the wine**）を生産しようと企てれば年間120人の労働を要する、という事情におかれているものとしよう。それゆえに（**therefore**）イングランドはワイン（**wine**）を輸入し、それをクロス（**cloth**）の輸出で購入することが自国の利益になると考えるであろう。
- [4] ポルトガルでワイン（**the wine**）を生産するには年間80人の労働しか要せず、同国でクロス（**the cloth**）を生産するには年間90人の労働を要するとしよう。それゆえに（**therefore**）、ポルトガルはクロス（**cloth**）と交換にワイン（**wine**）を輸出することが有利であろう。この交換は、たとえポルトガルが輸入するクロスが同国でイングランドよりも少ない労働で生産できるとしてもなお、行なわれるであろう。ポルトガルが90人の労働でクロスをつくることができても、それを生産するのに100人の労働を要する国から、それを輸入するであろう。なぜならば、ポルトガルにとってはむしろワインの生産に自国資本を使う方が有利だからであり、ワインと引き換えにイングランドからクロスを入手すれば、自国資本の一部をブドウの栽培からクロス製造に転用して生産可能になるクロスよりも、より多くクロスを入

7 本節で展開する議論のより詳しい内容は、田淵（2006：第3章）および田淵・久松（2018）を参照。

手するであろう。

[5] こうしてイングランドは、80人の労働の生産物と交換に、100人の労働の生産物を与えるであろう。このような交換は、同一国内の個人間では行なわれえないであろう。100人のイングランド人の労働が80人のイングランド人の労働と交換に与えられることはありえないが、100人のイングランド人の労働の生産物が、80人のポルトガル人、60人のロシア人、あるいは120人の東インド人の労働の生産物と交換に与えられることはありうる。単一国内と多数国間のこの相違は、次の事情を考察することで容易に説明できる。すなわち、資本がより高い利潤もたらす用途を求めてある国から別の国へと移動するのは困難だが、同一国内のある地方から別の地方へと資本がつねに移動することは活発に行なわれているのである*。

[6] *こうしてみると、ある国が、機械と熟練について非常に優れ、したがって隣国よりもはるかに少ない労働で諸商品を製造しうるとしても、その国が、この諸商品と交換に、自国の消費に要する穀物の一部を輸入することがありうる、ということは明らかであろう。たとえその国のほうが穀物の輸入先となる国よりも、土地が肥沃で、少ない労働で穀物を栽培できるとしても、そうなのである。2人の人間がいて、ともに靴も帽子も作れる。一方が両方の仕事で他方に優るとする。ただし一方の人が帽子製造で競争者に優る度合いがわずかに5分の1すなわち20%であるのにたいし、靴製造のほうでは3分の1すなわち33%優っているとしよう。優れたほうは靴製造に専従し、劣るほうは帽子製造に専従するのが、両者の利益ではないか？ (Works I: 134-136, 強調引用者⁸)

「4つの数字」の標準的解釈

現代の国際経済学および貿易論の事実上すべてのテキストブックに登場する「リカード・モデル」において、「4つの数字」は、2国2財モデルにおいて「財1単位の生産に必要な労働量」ないし「労働投入係数」を示すと誤って解釈されてきた。

両国において労働投入係数の比がアウトルキー価格（貿易以前の国内相対価格ないし機会費用）を表す。この数値例では、 $100/120 < 90/80$ が成り立つので、イングランドはクロス生産、ポルトガルはワイン生産に比較優位をもち、貿易開始後に両国は比較優位財の生産に完全特化するとされる。

「リカード・モデル」は、現代のテキストブックの祖型であるサミュエルソン『経済学』（初版刊行は1948年）に現れる (Samuelson 1948)。その内容は J. ヴァイナーと G. ハーバラーが1930年代に展開した論争で形づくられた。貿易モデルとして初めて（線

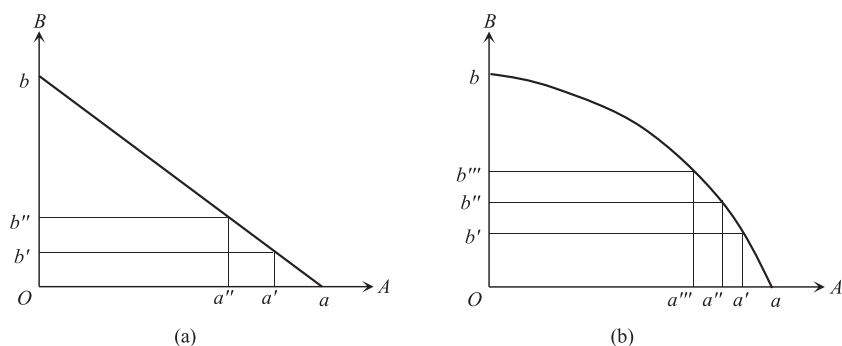
8 リカードの著作からの引用・参照は Ricardo (1951-1973) から行い、Works volume: page (原著ページのみ) と表記する。

表1 「4つの数字」の標準的解釈

財1単位の生産に必要な労働		
	クロス	ワイン
イングランド	100	120
ポルトガル	90	80

（出所）たとえば，Viner（[1937] 1955: 445）をみよ。

図1 ハーバラーの代替曲線



出所：Haberler（1933: 132, 訳：290; 1936: 176）より。

型のリカード型に対比して）原点にたいして凹型の生産可能性フロンティアを描いたのはハーバラー（Haberler [1930] 1985）であった。

ハーバラーはリカード引用部分 [3] [4] を次のように書き換え，表1のヴァイナーと同じ理解を示した。

イングランドでクロス1単位は100労働時間を要費し，ワイン1単位は120労働時間を要費する。ポルトガルでクロス1単位は90労働時間を要費し，ワイン1単位は80労働時間を要費する。……かくてポルトガルは両生産部門において絶対的優位を有するが，しかもこの優位はワインにおいてクロスにおけるよりも大である。すなわち，費用差異はクロスにおけるよりもワインにおいて比較的著しいから，ポルトガルはワイン生産において比較優位をもつわけである。（Haberler 1933: 98, 訳：220）

こうした標準的解釈に立脚する現代の論者の眼には，リカードの論理が不十分なものに映る。たとえば，貿易理論史にかんする有名なサーベイ論文を著したJ. チップマンによれば，上記引用部分の [3] は，「不合理な推論 non sequitur である。なぜなら，そ

9 図1は1930年の論文と同様の図を著書（Haberler 1933; 1936）から引用した。Haberler（1936）はHaberler（1933）の英訳とされるが，章立てや用語法に相違が見られる。なお，新古典派貿易理論の誕生について批判的に検討したものとして，田淵（2006：第5章）ならびにTabuchi（2017a）を参照。

の箇所までではポルトガルについて何も述べられていないからである」。続く [4] の最初の二文も、[3] と「同時発生するものと読まれなかりは同様に不満足なものである。……この法則にかんするリカード自身の論述はまったくもって舌足らずであり、彼がそれを本当に理解していたか疑わしくなるほどである」(Chipman 1965: 479-80)。チップマンほどの貿易理論の大家が（むしろ伝統的解釈に縛られた大家だからこそ）リカード自身の論理を読みとることができず、逆にリカードの論理が誤っていると一方的に切って捨てるのである。

リカードが発見したはずの「比較優位の原理」をリカード自身が理解していないとすれば、別の理論家が発見したという仮説をつくらなければならない。J. ミルがリカードに教えた (Thweatt 1976; 1987) とか、あるいは自らに「優先権 priority」があると主張していたロバート・トレンズ大佐が発見者であった、など。「優先権」論争は 19 世紀以来、3 世紀にまたがって迷走してきた。¹⁰

「4つの数字」の真の意味

21 世紀初めに「4つの数字」の真の意味を明らかにし、リカードこそが「比較優位の原理」の真の発見者であると主張して国際的に注目されたのが R. ラフィンである (Ruffin 2002; 2005)。リカードの「4つの数字」は労働投入係数を示すとする伝統的解釈はミル父子以来の誤解であり、そうではなくそれらは「現実の貿易において典型的に交換される特定量の財の生産に要する労働費用」(Ruffin 2002: 742-743) を示すとした（つまり、貿易パターンと交易条件は所与である）。さらに、リカードの論述においては貿易利益にかんする複雑な論証は不要であり、4つの数字のうち、2つの数字どうしの引き算で両国の貿易利益を示すことができるということを明らかにした Sraffa (1930) の功績が再評価された。ラフィンが示した新解釈の要点は以下の通りである。

10 J. ミルが「比較優位の原理」について草案を書いてリカードに与えたとするトゥイトの議論については後述する。「優先権」論争については吉信 (1991: 第2章; 1997: 第5章) を参照。Seligman (1911), Robins (1958), Chipman (1965), Irwin (1996) はトレンズに優先権を認めた (ラフィンの新解釈を知る前の Maneschi 1998 も)。本稿冒頭で引用した講演で実はサミュエルソンも次のように語っている。「リカードの数字と言いましたが、比較生産費説の主張者としての優先権については、トレンズ大佐がリカードと同等ないしそれ以上の権利を有していると言っても過言ではありません。学説史においては、より偉大な名前がより劣る名前を駆逐することがよくあるのです」(Samuelson [1969] 1972: 678, 訳: 349)。

トレンズは貿易理論史の転換点でトリックスターのような役割を果たして標準的理論の形成に貢献した。ナッソー・シーニアとの論争を通じて「相互需要説」の確立に寄与したと並んで (田淵 2020; 2022 参照)、「比較優位の原理」の発見者としての「優先権」を主張したことはその最たるものであり (Hisamatsu 2016 参照)、「4つの数字」に長らく人々の注目を引きつけることに貢献した。

現在では、「比較優位の原理」を示す「4つの数字」の数値例を最初に示した文献は、リカード『原理』初版 (1817) の3年前に出版された [Anon.] (1814) であったと認定されたことにより「優先権」論争は一応の決着を見ている (久松 2016 を参照)。しかしながら、後述するように、本稿は「4つの数字」に囚われた研究史そのものを疑問視する立場に立っている。

表2 スラッフア＝ラフィン解釈

現実に交易される特定量の財の生産に必要な労働（人／年）			
	X 単位のクロス	Y 単位のワイン	貿易利益
イングランド	100	120	20
ポルトガル	90	80	10

（出所）Ruffin（2002）、Maneschi（2004）の論述をもとに筆者作成。

いま、引用文 [2] において、イングランドの X 単位のクロスとポルトガルの Y 単位のワインが交易されているとしよう。引用文 [3] は、イングランドが X 単位のクロスを生産するために 100 人を必要とし、Y 単位のワインを生産するために年に 120 人を必要とするとすれば、イングランドは 20 人の労働を節約することになり、「それゆえに、イングランドはワインを輸入しクロス輸出によって購入することが利益になると考えるだろう」と読むことができる。同様に、引用文 [4] でリカードはポルトガルについて続けて、Y 単位のワインを生産するのに 80 人、X 単位のクロスを生産するのに 90 人必要だとする。明らかにポルトガルは、Y 単位のワインを生産しこれをイングランドの X 単位のクロスと交易すれば、10 人の労働を節約することになるであろう（Ruffin 2002: 741-742）。

標準的理解に従っていた A. マネスキは、直前の著書（Maneschi 1998）で提示していた自説を撤回してラフィンの新解釈を支持し、これを「スラッフア＝ラフィン解釈」と命名した（Maneschi 2004）。この新解釈が与えた衝撃は大きく、これに触発された多くの研究が生みだされた。

しかしながら、日本においては、ほぼ同様の理解を行沢健三が約 30 年も先行して提示していたのである（行沢 [1974] 1988; 1978）。行沢もまた、標準的解釈はミル父子以来行なわれた「変型理解」であるとして批判し、リカード自身の論理に従った解釈として「原型理解」を提起した。変型理解の特徴は以下の 5 点である（行沢 1978: 206-207）。

- （i）引用文 [3] [4] [5] を一括引用して、ワンセットの思考表現として提示する。
- （ii）そこから逆に、貿易パターンと貿易利益の決定にかんしてリカードの叙述は不十分であると指摘し、補足説明を試みる。
- （iii）「一括引用」に対応して、「4つの数字」を労働投入係数（財 1 単位当たりの生産に必要な労働量）として図表化する。

11 行沢は「変型理解」の典型的な例として、先述のチップマンがリカードの論理を「不合理な推論」と批判した部分を引用している（行沢 1978: 210）。ラフィンとマネスキも同様にチップマンに言及している（Ruffin 2002: 741; Maneschi 2004: 2-3）。

(iv) その図表において、「貿易以前」の両国の生産費ないし交換比率を示す。

(v) リカードには交易条件決定理論が欠如しているとし、決定要因についての説明がないまま、引用文 [5] の第一文においてクロス1単位対ワイン1単位の交易条件を設定している。

他方でリカード自身の論理に忠実な理解（原型理解）を行なうために、最初に着目された解釈上のポイントは、引用文 [3] の「それゆえに (therefore)」である。イングランドの貿易パターンと貿易利益を判断する根拠は、「それゆえに (therefore)」よりも前に示されているはずである。ここから、現実の世界市場で成立している交易条件（特定量のクロスと特定量のワインの交換比率）をリカードが前提としていたことが解明される。特定量の各財に要する生産費から貿易の方向と利益が確定されるというわけである。この解釈上の根拠は、引用文 [2] [3] の定冠詞に求められた。

引用文 [2] (The quantity of wine which she shall give in exchange for **the** cloth of England) の定冠詞 (The, the) を「意識的に」訳し直すと「ポルトガルがイングランドの『特定量の』クロスと交換に与えるワインの『特定の量』は」となり、引用文 [3] (that to produce **the** cloth may require the labour of 100 men for one year; and if she attempted to make **the** wine) においてクロス (cloth) とワイン (wine) に付けられた定冠詞 (the) を意識して訳し直すと「イングランドが、『その特定量 (a ヤール) の』クロスを生産するのに年間 100 人の労働を要し、もし『その量 (b ガロン)』ワインを生産しようと企てれば年間 120 人の労働を要する」となる。したがって、イングランドで年間 100 人の労働によって生産されうるクロスの「特定量」と 120 人の労働で生産されうるワインの「特定量」とが「現実の世界市場で……1対1で換えられているのである」(行沢¹² 1978: 208)。

ここで示された原型理解の特徴は、以下のようにまとめられる(森田 [1977] 1988: 308)。

(i) リカードは、「貿易以前」を想定せず、現実にはイングランドのクロスとポルトガルのワインが交易されているという事実から出発する。

(ii) 現実には成立している交易条件(クロスとワインの交換比率)を所与とする。現に等価で交換されている一定量のクロスおよび一定量のワインをそれぞれの計算単位とし、

12 行沢(1978)も Sraffa (1930) を取り上げて検討しているが、「4つの数字」の一括引用および図表化という自ら設けた変型理解のリジッドな条件に惑わされたためか、スラフファが「4つの数字」を労働投入係数から明確に区別している点を看過している。

(iii) それぞれの国について、輸入品の入手費用（輸入品の対価となっている輸出品の生産費）と、それを自国で生産したとすれば要するであろう費用とを比較して、

(iv) 前者が後者よりも小さいがゆえに貿易が行なわれ、労働の節約が実現されていることを説明しているのである（ヴァイナーが命名した「18世紀ルール」¹³と同様のもの¹⁴）。

Ⅲ 「4つの数字」の議論に囚われずリカードの著作全体から 貿易理論を把握する——G. ファツカレロ

「4つの数字」の部分は第7章のわずか15%を占めるにすぎない

「4つの数字」の真の意味をめぐるラフィンたちの議論によって突破口が開かれた。テキストブックの「リカード・モデル」は実際にはJ. S. ミルの理論をモデル化したものであるという事実が広く認識されるようになった。もちろん、教育の現場では依然として「リカード・モデル」が貿易の基礎理論として教えられ続けているものの、研究の先端でリカード自身の議論を「リカード・モデル」と同一視する主張がなされることはもはやないと言ってよい。それでは、「4つの数字」の真の意味を明らかにしたことをもってリカード貿易理論の特質を把握したと考えるべきだろうか？

ラフィンとマネスキたちはそのように考えているようである。彼らは現在の主流派貿易理論を支える二本柱である「比較優位の原理」および「相互需要説」（需要供給価値説）には疑問を抱かず、リカードはテキストブックと同じ原理をテキストブックとは異なる提示法で示しただけであって、両者のあいだに互換性があると捉えている（Maneschi 2004; 2008）。たとえば、マネスキ（Maneschi 2004: 436）はラフィンの新解釈をも

13 「18世紀ルール」を提示した冊子の著者は長らく不明だったが、今日ではヘンリー・マーティンと確定している（Martyn 1701）。マーティンについては馬場（2005：第5章；2008：第5章）が詳しく紹介している。

14 2014年9月11-12日に早稲田大学で開催された国際会議（リカード研究会主催、コーディネーターは出雲雅志・神奈川大学教授）において筆者は行沢健三の「リカード比較生産費説の『原型理解』」について報告を行った（Tabuchi 2017b）。ラフィン、マネスキ両教授も招聘され参加していた。両教授は行沢が新解釈の先駆者であることを快く承認した。予定討論者であったマネスキ教授は次のように述べた。「本報告によって日本語を読むことができなくなったという理由でこれまで知らなかった日本の理論家のリカード比較生産費説への貢献を知ることができた。行沢教授が1974年という早い時期に、リカード比較生産費説はリカード自身の論理に従って理解されねばならないと主張した事実を全面的に同意したい。……行沢が示した『スラッファ＝ラフィン解釈』と同様の推論は、私がラフィン教授の論文を知って以来全面的に支持してきた解釈である」。

筆者にとってこれは研究における「言語の壁」の存在（英語で発表してはじめて研究業績として認知される）を痛感させられる出来事であった。しかし同時に、国内においてさえ「学会の壁」が厳然と存在することも明らかになった。行沢の「原型理解」を知って、海外の研究者ばかりでなく、日本の経済学史研究者のあいだからも驚きの声があがったからである。「わが国の国際貿易理論史の研究は主として経済学史学界というよりは国際経済学界において展開された」とする根岸隆（2000: 59）の回想を参照。

表3 表2を労働投入係数表示に改めたもの*

労働投入係数=財1単位の生産に必要な労働(人/年)		
	クロス	ワイン
イングランド	100/X	120/Y
ポルトガル	90/X	80/Y

(出所) Maneschi (2004: 436)。

* $(100/X) / (120/Y) < (90/X) / (80/Y)$ が成り立つ。

とに労働投入係数表示に転換した表を作成し、これをもとにリカードの論理はテキストブックで説明される「比較優位の原理」と本質的には同等のものであると主張している(表3を参照)。

このような見方に異議を唱えたのが G. ファッカレロである (Faccarello [2015] 2017)。

ファッカレロは、ラフィン、マネスキたちや彼らに触発された文献における議論の対象が『原理』第7章のわずか15%を占めるにすぎない「4つの数字」の部分に限定されているうえに、新古典派のレンズを通して実物タームのみに着目する点を批判し、リカード貿易理論の再解釈をさらに進めて、第7章後半の貨幣にかんする議論や『原理』全体、さらにはリカードの他の諸著作をも視野に入れた注目すべき読解を提示した。

「商業上のあらゆる取引は独立の取引である」¹⁵

ファッカレロが行った読解の結論は以下の3点に要約できる。¹⁶

(i) リカードにおいては、国内交換と国際交換のあいだに重要な差異はない。リカードの貿易の分析はマクロ・レベルで行われているように見えるが、国でなく個人こそが交易の主体である。すべての交換は貨幣を介して行われ、国内価格から区別された国際価格は存在しない。国内取引・国際貿易のいずれにおいても、ミクロ主体が自己の利益にもとづいて取引を行い、価格は自然価格に落ち着く傾向を有している。

(ii) 一国の貿易利益は競争市場における個別主体の行動の「意図せざる結果」であり、「比較優位の原理」によって貿易フロー(貿易パターン)を説明することはできない。リカードが「比較優位」という言葉を貿易に関連して用いたことは一度もない。

15 リカードのこの一文 (*Works I*: 138) が『原理』第7章に登場することに注意が必要である。この事実はファッカレロの読解を補強する。第7章では通常、国が主体となって貿易取引が行われているかのように表象されるが、リカードの視点は『原理』全体で一貫しており、第7章においても個別の経済主体が自然価格にもとづいて交易を行う過程が描かれていることになるからである。なお、Faccarello (2022b) はここで議論している Faccarello ([2015] 2017) の縮約版であるが、タイトルはこの引用文からとられている。

16 ファッカレロ教授は2016年3月~4月の約1ヶ月間、同志社大学に Visiting Scholar として滞在し、この論文をめぐってセミナーを行った。以下の記述はこの論文だけでなくセミナーや滞在中の議論をも踏まえた内容である。

(iii) リカードは攪乱的なショックが貴金属（貨幣）の分配の変化を通じて各国における貨幣価値の相違をもたらし、それが自然価格を変化させ、さらにそれによって貿易フローが変化するという連続的なプロセスの分析を重視した¹⁷。

ファッカレロが提示した読解は、リカード自身の論理にもとづいて、「4つの数字」の部分だけでなく著作全体を通して貿易理論の特質を読み解こうとする試みであると言える。彼が独自の読解を提示する際に挙げた豊富な典拠のなかでもとりわけ重視したりカードの主張は次の一節である。

私が主張するすべてのことは、諸商品が独占の対象でないかぎり¹⁸、それらが輸入国で販売される価格を究極的に左右するものは、輸出国でのその自然価格である、ということに帰着する。（*Works I*: 375, 強調引用者）

リカードは自然価格を「生産費の別名」（*Works II*: 46）、「[商品の] 自然価格、すなわち貨幣でのその生産費」（*Works I*: 383）と規定しているので、リカードは国内交換も国際交換も生産費で価値が決定されると考えていたと言ってよい。

J. S. ミルの需要供給説への転回は不要であった

以下でファッカレロの読解を敷衍しよう。

1国において商品の相対価値を規定するのと同じルールが、2国あるいはそれ以上の国のあいだで交換される商品の相対価値を規定するわけではない。（*Works I*: 133）

『原理』第7章におけるリカードのこの立言が貿易理論史において「躰きの石」となってきた（Tabuchi 2018; Tabuchi and Hisamatsu 2022）。

J. S. ミルはこれを、国内交換に適用される生産費価値説は国際交換には適用できないと誤読した。そこから J. S. ミルは国際交換に需要供給価値説を適用する必要がある

17 注目すべきことに、小島（1952：第4章）は、金移動を含む2国3財の数値例によって、このうち (i) と (iii) の観点をすでに提示していた。

18 田淵（2022: 52）では、この「独占」を「植民地貿易にみられるように、ある国だけがある財を特定市場に供給する特権もっている状態」を指すとしたが、不正確であった。その場合でも植民地の輸入価格は本国企業間の競争によって本国の自然価格に落ち着くからである（本国の自然価格が他の国の自然価格より高いことはあり得るが）。この「独占」は「外国市場の独占がひとつの独占的な会社の手中」（*Works I*: 340）にある状態とするのが正しい。その場合にのみ、輸入国での販売価格が他の国々における自然価格を上回る可能性がある。久松（2022: 103）を参照。

という結論に至ってしまった。

価値は生産費に比例するという原理は、こうして適用できなくなるから、われわれは生産費の原理に先行する原理、生産費の原理を結果的にもたらず原理、すなわち需要と供給の原理に立ち返らなければならない。(Mill [1844] 1967: 237, 訳: 218)

しかし、リカードが国内交換も国際交換も生産費によって規制されると考えていたとすれば、リカードには「交易条件不確定問題」(Schumpeter [1954] 1994: 608) など最初から存在せず、この J. S. ミルの転回は不必要だったことになる。

先の立言でリカードが「同じルール」と呼んでいるものは、「2つの商品の生産費は投下された労働量に比例する」というルールである。国内価値も国際価値も自然価格(生産費)によって規制されるが、国際交換においては自然価格(生産費)が労働量に比例するとは限らないとリカードは論じているのである。¹⁹他方で、リカードは「[商品の]自然価格、すなわちその貨幣上の生産費は、実際に貨幣の価値変動によって変更されるだろう」(*Works* I: 383) と論じており、輸出国の生産費が価格を決定する面ばかりでなく、貴金属の分配の変更が貨幣価値を変化させ、それが自然価格(ひいては市場価格)を変化させるというプロセスをも視野に入れている。²⁰

J. ミルによる分析構図の転換

リカード『原理』初版の翌年に出版された「植民地」と題された J. ミルの論文には、「4つの数字」をリカードの論理に即して解説した箇所(行沢の言う「原型理解」を示した部分)が存在する(James Mill 1818: 269)。しかし J. ミルはその後、リカード『原理』を教科書的に整理した『経済学綱要』を刊行したが(初版 1821年、第2版 1824年、第3版 1826年)、よく知られているように、初版と第2版の外国貿易を論じる際に

19 もっと単純に言えば、この立言はたんに引用文 [5] の次の内容を言い換えただけのものである。「こうしてイングランドは、80人の労働の生産物と交換に、100人の労働の生産物を与えるであろう。このような交換は、同一国内の個人間では行なわれえないであろう。100人のイングランド人の労働が80人のイングランド人の労働と交換に与えられることはありえないが、100人のイングランド人の労働の生産物が、80人のポルトガル人、60人のロシア人、あるいは120人の東インド人の労働の生産物と交換に与えられることはありうる」(*Works* I: 135)。

20 田淵(2022)ではこの問題をシーニアの生産費説と対比して詳細に論じている。なお、リカードが「それ[外国貿易]を規制できるのは、それらの国で諸商品が生産されうるその自然価値ではなくてその自然価格を変更することによってだけである」(*Works* I: 133) と論じているのもこの意味である。

21 この文献を初めて正当に評価したのは吉信(1991: 第4章)である。その解説については田淵(2006: 第4章)および Tabuchi (2017b) を参照。両者にはこの箇所の引用文も含まれる。

22 J. ミルは『経済学綱要』の序文でこう述べた。「私の目的は、経済学の学校教科書(a school-book)を編み、この学問の本質的な諸原理をすべての非本質的な論題より分離し、諸々の命題を論理的順序に従って明快に記述して、各々にその論証を付すことにあった」(James Mill 1826: iii, 訳1)

「4つの数字」の設例で誤りを犯し、J. S. ミルの提言に従って第3版で訂正するという不手際を露呈した（J. Mill 1821; 1824; 1826）。

J. ミルが1818年の段階で「4つの数字」にかんする完全な「原型理解」を提示しながらなぜそのような不手際を露呈したのか、またそもそも『綱要』でJ. ミルが提示した設例は「変型理解」に相当するものであるが、なぜJ. ミルが「原型理解」から「変型理解」に転じたのかは経済学史上の謎として残されている²³。いずれにせよ、J. ミルが『綱要』で用いた設例はJ. S. ミルに継承され、『未解決論集』第1論文（J. S. Mill：[1844] 1967）および『経済学原理』（J. S. Mill [1848-71] 1965）で繰り返し用いられた。

この経緯にかんする研究は日本で蓄積されていたが（吉信1991：第4章；田淵2006：第4章；Tabuchi 2017 b），ファッカレロが詳細かつ的確な整理を行った（Faccarello 2022 a）。ファッカレロの論点は明快である。J. ミルこそがリカードの「事後的アプローチ（ex-post approach）」から「貿易前」を想定する「事前的視点（ex-ante perspective）」へと分析構図を転換したというのである。「4つの数字」が労働投入係数に置き換えられたのはその結果にすぎないとされる。

IV 「4つの数字」への囚われが J. S. ミルを 需要供給価値説への転回に追い込んだ——塩沢由典²⁴

J. S. ミルはなぜ価値論の転回に追い込まれたか

III で見たように、リカードが国内価値ばかりか国際価値も自然価格によって規制されると考えていたとすれば、リカードには「交易条件不確定問題」など最初から存在せず、J. S. ミルの国際価値論における需要供給価値説への転回は不必要であったという

23 ひとつの原因はJ. ミルの『綱要』が嚆矢となった教科書的な整序（‘didactical usefulness’というごまかし）がもたらす弊害である（田淵2006：5ほか。この観点はFaccarello 2022 aでも示唆されている）。この問題を考察するには、以下のような発想の転換が必要であろう。従来の議論では、リカード自身が『原理』第7章で「比較優位の原理」を意識的に展開したことが自明視されてきた。たとえば、行沢とラフィンとともに、J. ミルが「比較優位の原理」の発見者であり彼がリカードにこの原理についての草案（「4つの数字」を含む引用文 [3] [4] [5] に相当する内容）を渡したとするトゥイトの仮説（Thweatt 1976: 19-28）にたいする反証として、J. ミルがリカードに宛てた1816年11月18日付の手紙の一節を挙げている（行沢1978: 212-215; Ruffin 2002: 735-736）。「同じ種類の商品を国内で生産するよりも外国で生産するほうがいっそう多く要費するのにそれらの諸商品をその外国から輸入することが一国にとって有利な場合があるという点……は最高の重要性をもつ新しい命題でありませんが、あなたはそれを完全に証明しておいでです」（Works VII: 99）。しかし実際にはリカードは「比較優位」という語を貿易に関連して用いたこともなければ、そうした原理にふたたび言及することもなかった。逆説的な言い方になるが、この意味で、J. ミルこそが「比較優位の原理」の発見者であったと言える。つまり、J. ミルはリカードの論述のなかにこの原理を「発見」し、これを切り取って、まずは「植民地」で祖述し、のちに『綱要』で教科書的な整序・図式化を試みたのである。

24 本節で扱うテーマのより詳細な解説は田淵（2015; 2020）を参照せよ。

ことになる。それでは、なぜ J. S. ミルは価値論の転回に追い込まれたのだろうか？この問いにたいして、J. S. ミルがリカードを誤読したといった経済学史的考察からではなく、J. S. ミルの理論構造にもとづいて回答を与えたのが、塩沢の「新しい国際価値論」(塩沢 2014, Shiozawa 2017 a, 2017 b) である。

塩沢(塩沢 2014, Shiozawa 2017 a) は、多数国多数財・投入財貿易・技術選択を想定する一般の場合(「リカード・スラッファ貿易経済」)において国際価値(価格・賃金)が一義的に定まることを証明した。さらに、生産可能集合の極大面に依拠せずに、国際価値を生産技術の2部グラフによって特徴づけることに成功し、貿易状況における失業の分析が容易になった²⁵(Shiozawa 2019: §6)。

2国2財(または国と財の数が等しいか、国の数が財の数より多い場合)は生産可能集合に内部端点(完全特化の点)が現れる特殊なケースである。J. S. ミルは、国際価値論として相互需要説を導入する際に、「4つの数字」に象徴される2国2財の完全特化ケースに分析を限定したことによって生産費価値説から需要供給価値説への価値論の転回に追い込まれた。貿易理論における J. S. ミルの転回がのちの新古典派による需要供給価値説の全面化に道を開いたのである²⁶。

図2は、通常のテキストブックの「リカード・モデル」と同じものであり、その名に反して、リカードでなく J. S. ミルが想定した貿易状況を表している。

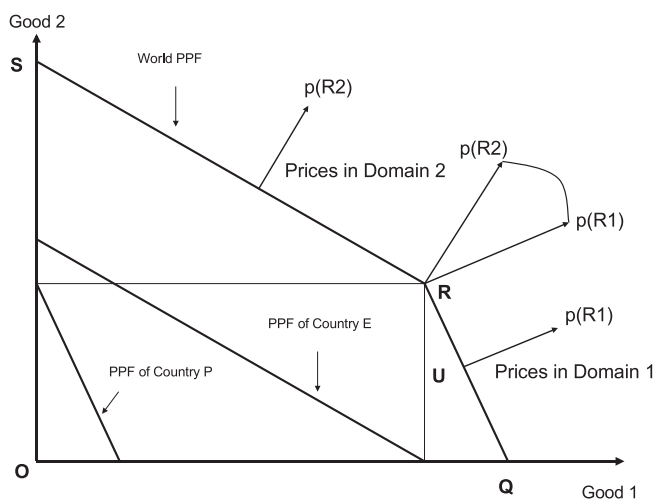
J. S. ミルは、両国に貿易利益(労働者の実質賃金の上昇)が生じる場合を分析対象としなければならないと考えた。それが当てはまるのは、2国2財モデルでは両国が各財に完全特化する場合のみであり、世界生産は R 点(完全特化点)に限られる。R 点において価格は $p(R1)$ から $p(R2)$ のあいだで変動する。両国の労働の存在量が与えられれば生産量は確定する。このことこそが、ミルが「純粹交換経済」(生産量が固定され価格調節が行われる経済)の考察に追い込まれた事情であった。J. S. ミルは、「[輸送費の存在を無視すれば] 一国が自国消費のために生産するもので同時に他国のために生産しないものはひとつもない」(J. S. Mill [1848-71] 1965: 601, 訳(3): 289)²⁷と述べて、線分 QR(領域1)あるいは線分 RS(領域2)で生産が行われる場合を仮定

25 生産可能集合に依拠せずに貿易状況を議論することには、Vで述べるように、失業の分析に道を開くばかりでなく、より本質的な意義がある。

26 J. S. ミルの国際価値論が古典派から新古典派への転換点となったという観点をシュンペーターも表明している(Schumpeter [1954] 1994: 612-613)。安井琢磨も同じ観点を示した。「古典派と新古典派の媒介の役目を果たしたのは私のみるところでは、ジョン・スチュアート・ミルであった。ミルは古典派経済学の伝承者であるとともに、古典派から近代経済学への橋渡しをしたという意味で、新旧交代の分水嶺であった。ミルは、一方ではリカードを継承し、他方で彼の国際価値論において近代経済学の萌芽を示した」(安井 1979: 73)。後者は久松太郎氏から教示された。

27 J. S. ミルが国際価値(相互需要説)を論じた『経済学原理』第3編第18章は、多くの部分を『経済学試論集』第一論文から引用しているが、この一文は『原理』で新たに書き加えられたものである。シジウィックはグレアム以前に「結合財」の重要性を認識した理論家のひとりであるが、J. S. ミルのこの仮定を批判した(Sidgwick [1901] 1968: 213)。

図2 2国2財の場合の生産可能集合



によって排除した。領域1および領域2では、「大国」側で両財が生産され、国際価値（価格）は「大国」側の国内価格に一致する。「大国」でない方の国の輸出財は「大国」でも生産されるので、グレアムのいう「連結財（link commodity）」としてはたらしき（Graham 1948）²⁸、国際価値（価格）は生産費によって決定できる。J. S. ミルはこのケースを排除したのである。

J. S. ミルは多数国多数財のケースについては、たんに「2国間および2商品間において成立する価値の法則は、その数がこれより多い場合にも成立する」（Mill [1848-71] 1965: 601, 訳（3）: 289）と断言しただけであった。²⁹

「現代古典派価値論」

「新しい国際価値論」と並行して、古典派価値論（リカードの生産費価値説）を現代的に再構築した新たな国内価値論として、「現代古典派価値論」が展開された（Shiozawa, Morioka, and Taniguchi 2019）。これは、最小価格定理（サミュエルソンのいう非代替定理）と上乗せ率による短期の価格理論、ならびに「谷口・森岡の結果」にもとづく価格と数量の独立、数量調節の理論という特徴をもつ。³⁰

「現代古典派価値論」は、「無限の視野・計算・働きかけを有する合理的経済人」を想

28 グレアムの「連結財」については Sato (2021) および佐藤 (2021) を参照。

29 シュンペーターは多数国多数財のケースへの一般化が容易であるとの J. S. ミルの見通しについては否定的であった。「ミルは、任意数の国において任意数の商品の貿易がなされる場合も、2国2商品間の貿易と同じ本質的原理にもとづいて行われ『なければならない』と考えていた。しかし事実はかならずしもそうではない。国が2国より多い場合に議論を一般化するのは、確かにそれほど困難ではない……しかし商品の数を n 商品の場合にまで拡大するのは、はるかにより困難である」（Schumpeter [1954] 1994: 613）。

30 「現代古典派価値論」についてはラヴォアによる紹介も参照せよ（Lavoie 2022: 190-191）。

定する新古典派経済学（アロー・ドブラーの一般均衡理論）を批判して「限定合理性」を提唱し経営組織における意思決定を論じたハーバート・サイモンの次のような見方にも合致する。

価格は、組織間や組織内の行動を調整するためのメカニズムのひとつに過ぎない。数量調節による調整は、おそらく日常的な観点からすればはるかに重要なメカニズムであり、多くの状況において、価格による調整よりも優れた配分の仕事をするようになる。……価格でなく販売済みおよび在庫の財の数量こそが、これらのシステムを調整するための情報を提供する。……ビジネスにおける計画と価格設定にかんする観察者の多くは、（農業と鉱業部門を除いて）数量をシグナルとして用いるモデルのほうが、価格を主要な調整メカニズムとするモデルよりも、先進諸国の国民経済に近いと主張している。（Simon, 1991: 40）³¹

塩沢たちの数量調節の理論の基礎となっているのは、スラッフアの1926年の論文（Sraffa 1926）から発展させた次のような観点（「スラッフアの原理」）である（塩沢1990: 第6章; 2014: 75, 302-304）。すなわち、新古典派経済学が、企業の生産量の制約するものとして費用増大（収穫逓減）を仮定し、市場の価格調節のもとで「売りたいだけ生産し、売る」「売りたいだけ売れる」という非現実的な企業・経済像を想定するのにたいし、現代古典派価値論は、企業にとっての生産量の制約は需要（販売量）であるとし、企業は設定価格のもとで数量調整を行いつつ「売れるだけ売る」「売れるだけ生産する」（したがって、「もっと売るための行動＝営業活動やマーケティング活動を行う」というより現実的な企業・経済像を想定する。

塩沢は「純粋交換経済」を想定する新古典派経済学をジョン・ヒックス（Hicks 1975）に倣って *Catallactics*（「交換の学」）と特徴づけ、古典派経済学の *Plutology*（「生産の学」）と対比する。その観点に立って、経済学史上、古典派の *Plutology* から新古典派の *Catallactics* へとパラダイムが転回した際、J. S. ミルの貿易理論こそがその「転換の現場」となったと把握するのである。

31 「現代古典派価値論」とサイモンの結びつきはラヴォアも指摘している（Lavoie 2022: 190）。サイモンは『経営行動』の第4章と第5章でも主流派経済学と経営学の相容れない関係について論じている（Simon 1997）。『経営行動』は複雑系経済学の主要な源泉のひとつである。本書の初版が刊行されたのは1947年であり、それ以来、50年後の1997年に刊行された第4版に至るまで本論部分（第1章～第11章）に変更は加えられていない。

V 経済学史理解のための新たな座標軸 ——「ab ovo の構成」vs 過程分析

「ab ovo の構成」

塩沢は、ワルラスの経済理論あるいはアロー・ドブルーの一般均衡理論の特徴を把握するための概念として、「ab ovo の構成」というイメージ喚起的な表現を提唱してきた（塩沢 1997: 116; 1998: 110-111; 1999: 76-79, 83; 2004: 112）。塩沢は「ab ovo の構成」を〈過去の経済状態にかんする人々の経験が存在しないものと想定して、技術知識・資源の配分状態・消費者の選好といった与件を与えさえすれば、一挙に現在の経済が再構築されるとする理論的枠組み〉といった含意で用いている。

‘ab ovo’とは「卵から」を意味するラテン語であり、英訳すれば‘from the beginning’である。もともとはシュンペーターが『経済発展の理論』（Schumpeter [1912] 2006; 1926）の第1章で、ワルラスの経済理論を特徴づけるために用いた表現である。

私たちの農民は、その生産物にたいしてどれだけの数量の需要をどれだけの価格で見込めるか、さらに自分用の消費財と生産手段がどれだけの数量、またどれだけの価格で供給されるかを経験から学んでいる。よく知られているようなやり方で、私たちはこれらの数値が経験的に一定に保たれているとみなしている。こうした経験が与えられていない場合を想定しよう。土地も同じで、文化と技術だけでなく嗜好と財ストックも同じままであるが、価格と需要・供給、つまり現実においてその行動の基礎となるべき諸要素の数値がまったく知られていないと想定するのである。そのうえで、人々はどう行動するだろうかと問うてみよう。その結果は、実際に存在していて、どの経済主体にも必要なかぎり知られているような国民経済の状態を再構成することになる。……私たちは、実際にはすでに存在しているものを、私たちの眼前で、いわば卵から（ab ovo）生成させるのである。……経済活動が歴史的にいかに変化してきたかではなく、経済活動が任意の時点にいかに表示されるかを探求したいのである。歴史的な発生ではなく概念的な再構成が課題である。（Schumpeter [1912] 2006: 11, 訳：34, 強調引用者³²）

『経済発展の理論』英語版では、より簡略にこう記される。

32 シュンペーターは、ab ovo の箇所に、「ワルラス『純粹経済学要論』第4版1900年を参照せよ」との脚注を付している。1926年の『経済発展の理論』第2版（Schumpeter 1926: 9, 訳：38-39）にも上掲の引用文と同趣旨のやや簡略化された記述がある。

こうした図式は、よく知られた道具立てを用いることによってより洗練され、また経済システムの作動についてよりおおくの洞察が得られる。私たちはこうした「数量にかんする」経験が存在しないものと想定し、経済システムを卵から (ab ovo) 再構築するのである。あたかも同じ人々が、同じ文化、嗜好、技術知識をもち、同じ消費財と資本財のストックをもってはいるが、経験の助力なしで、意識的で合理的な努力により最大限の可能な経済的厚生を達成する道を自ら発見しなければならないというように、である。(Schumpeter [1934] 2021: 7, 強調引用者)

‘ab ovo’ という表現にシュンペーターが込めた含意は一貫している。筆者が確認し得たかぎりでは、シュンペーターは『経済発展の理論』のあと、この表現を『資本主義・社会主義・民主主義』(1943年)で1回、『経済分析の歴史』(1954年)で4回、用いた。前者では中央集権的な社会主義計画経済について論じる文脈で、後者のうち3回はワルラスに言及して、この表現を使用している。

生産計画は卵から (ab ovo) 樹立されるべきこと、すなわち、経済量や価値についてはなんらの先行経験もなく、また利用しうる資源・技術の概観といかなる種類の人々が同志であるかの一般的知識とから出発するほかはいかなる基礎をも有しないこと。(Schumpeter [1943] 1994: 185, 訳: 中 337-338)³³

批判者たちにとってもっとも滑稽に見えたバーム-バヴェルクの図式の特徴のひとつ……も、われわれがあらゆる経済理論は計画の理論であり、不可避免的に過去の成果……を与件として受けとらなければならない点を認識するやいなや、ただちに除去されるであろう。そのときにはわれわれは経済過程を卵から (ab ovo) 構想しようとするのを中止し、ただ前方のみを眺めて、「資本の投下量」のかわりに「なされるべき投資量」を考察すればよいことになろう。(Schumpeter [1954] 1994: 908)

これははなはだ人為的な構築物である。ワルラスは、あらゆる現存の財と過程とが、そのとき支配している諸条件に円滑かつ迅速に適応することが可能ならおそらく樹立されたであろう仕方で、均衡状態を卵から (ab ovo) 構築しようとしたのである。(Schumpeter [1954] 1994: 1002)

33 「ab ovo の構成」で想定される経済は市場経済であるが、中央集権的な社会主義計画経済が市場経済と同等の効率で実行可能かという問題にも関連する。「社会主義計算論争」の初期の参加者には、ワルラス派の E. バローネ (Barone 1908) と V. パレートも含まれる。ここでシュンペーターが社会主義にかんして「ab ovo」の表現を用いたのは偶然ではない。バローネにかんしては後述する。

[資本財がその所有者によって直接に消費されうるというワルラスの生産理論の特徴について] これは特定の生産用具たとえば機械などの場合にとりわけ明白な難点を生みだす。少なくとも可能性として、ある機械がその所有者の意思に従って瞬間的にたとえば安楽椅子に転化されうるなどと仮定するのは、まことに正真正銘の思い切った理論化である。……しかしそれは、資本財ストックの構造を卵から (ab ovo) 説明する論理としては利点がある。(Schumpeter [1954] 1994: 1010)

現在のわれわれにとっては、経済過程が、過去から受け継がれたのち、いざ活用されなければならないときにはつねに時代遅れになってしまうような状態に、いかにしてみずからを適応させていくかという、本質的に動学的な問題がここにあると思われる。ところがワルラスは、資本財と同じくストックが、あたかも現在行われている状況をすでに見越して過去に生産されてきたものに精確に等しいという大胆な仮定を設けて、この問題を取り除いた。これこそ、均衡体系を卵から (ab ovo) 構想すると述べた彼の章句が意味するところにほかならない。(Schumpeter [1954] 1994: 1022)

「ab ovo の構成」においては、経験なしの白紙の状態から一挙に経済を再構成するために、経済主体は無限の視野・合理性（計算能力）・働きかけ（意思伝達能力）をもつ合理的経済人である必要がある。「ab ovo の構成」は、ヒックスが批判した *Catallactics*（「交換の学」）の土台をなす思考様式であると捉えることもできよう。³⁴

「ab ovo の構成」の起源にかんする試論

IV では、古典派の生産費価値説から新古典派の需要供給価値説へと転回した際、J. S. ミルの貿易理論こそがその「転換の現場」となったとする塩沢の把握を紹介した。ここではさらに進んで、需要供給価値説だけでなく、「ab ovo の構成」の起源（少なくともそのひとつ）もまた「4つの数字」に囚われたミル父子によるリカード貿易理論の改変にあったとする仮説を提起したい。

現代の貿易モデルにおける生産可能性フロンティア（あるいは一般に生産可能集合）が「ab ovo の構成」の思考様式を可視化したものであることにはほとんど疑問の余地がない。生産可能集合に依拠する分析において、技術（投入係数）と生産要素の存在量および消費者の選好が与件として与えられれば、貿易前における生産可能な財の組み合

34 ヒックスは *Catallactics* の経済理論そのものだけでなく、*Catallactics* の発展史に偏重する経済学史研究にたいしても批判的であった。「シュンペーターの『経済分析の歴史』は経済学者をつねに *Catallactics* という意味での経済学にいかん貢献したかで評価している」(Hicks 1975: 325)。*Catallactics* への偏重は、貿易理論史の評価においてとりわけ顕著である。田淵（2020）を参照。

わせも貿易開始後の生産と消費も一挙に（視覚的に）再構成される³⁵。あらゆる時点の貿易状況も、その前の時点における貿易状況ではなく、その都度、アウトルキーの状態から再構成される。貿易利益は閉鎖経済から開放経済への移行に伴って1回限りで発生するものと捉えられる。

先述したとおり、貿易モデルとして原点にたいして凹型の生産可能性フロンティアを初めて描いたのはハーバラー（Haberler [1930] 1985: 10）であった。機会費用説にもとづくハーバラーの生産可能性フロンティアに致命的な欠陥があることを指摘したのがヴァイナーであった（Viner [1937] 1955: chap.8）。ヴァイナーによれば、ハーバラーが描いた生産可能性フロンティアは次の2つの非現実的な想定を不可欠の条件として成り立っている。

(i) 生産要素の供給は非弾力的である。つまり、経済に物理的に存在する生産要素はつねに最大限に生産に投入されている。

(ii) 代替的な用途にかんして生産要素は無差別である。つまり、生産要素は同質的であり、ある財の生産から他の財の生産へと瞬時に移動できる。

これらの仮定も「ab ovo の構成」で想定されているものと本質的に同じである。

生産可能性フロンティア（原点にたいして凹型ではない）を初めて描いたのがバローネ（Barone 1908）であったことは偶然ではないだろう。バローネはパレートとともにワルラスの支持者であり協力者でもあった。マネスキとトゥイトは、バローネが描いた生産可能性フロンティアを検討し、貿易前と貿易開始後の状況および貿易利益を完全に図示したものであると評価した（Maneschi and Thweatt 1986; Jones 2010）。

生産可能性フロンティアのもとになった〈貿易前→貿易開始後〉という分析構図を提示したのは、ファッカレロが明確に示したように（Faccarello 2022 a）、J. ミルであった。J. ミルは『綱要』で「4つの数字」の捉え方を変更することを通じてリカードの「事後的アプローチ」を「事前的視点」へと転換したのである。J. ミルが提示した分析構図においては、何が交易条件を決定するのかの説明が欠如していた。J. S. ミルはこの「交易条件不確定問題」をリカードの貿易理論から由来する難点であると誤認しながらも（いわゆる「ぬれぎぬ問題」）、相互需要説を考案することによりその補完を試みた。ミル父子によるリカード貿易理論の改変はこうして、のちの需要供給価値説の全面化への突破口となっただけでなく、「ab ovo の構成」にも道を開いたと言えるのではないか。

35 したがって、たとえば、労働投入係数と労働の存在量に加えて需要をも与件として設定しておきながら、そのような与件から再構成された生産可能集合において、価格決定にたいして需要が果たす役割とは何かについて議論するのは、ひとつの同義反復的な問いであろう。

浮上するリカードの分析構図

リカードは、特定の法則を明らかにするために、誇張された設例や「抽象的」で「非現実的」な方法を採用し、これを実際問題の解決に性急に適用したとしばしば非難される（いわゆる「リカード的悪弊（Ricardian vice）」Schumpeter [1954] 1994: 473）。ここではそうした通念とは反対に、リカードが採用した分析構図が過程分析を志向する「現実的」なものであったことを論じたい。

リカードは1820年5月4日のマルサス宛の手紙でこう述べた。「私の目的は原理を明らかにすることでした。そのために私は顕著な場合（strong cases）を想定してこれらの原理の作用を示そうとしました」（Works VIII: 184）。

リカードの著述にあるこうした傾向は、「仮説的な演繹法」（馬渡1990: 29）、「大胆もしくは明らかに非現実的な諸仮定にもとづく抽象的なモデルに、現実世界に妥当するとされる即時的諸結論にかんするあまりに大きな重要性を与える」（Sturm 2015: 449。若松2017: 17も参照）などといった芳しくない評価を受けてきた。S. ホランダールはこう極論する。

純粹に合理主義的な方法——研究のどの段階においても経験的な証拠を参照することなく、仮定された諸原因から諸結果を演繹するという方法——を採用することによって、『ニュートン以前』の時代に経済学を逆行させた責任がリカードにはあった。（Hollander 1979: 653, 訳：897）

ホランダールのこの評価は、あたかもものちの「ab ovo の構成」の難点をリカードに帰しているかのようである。

これにたいしてC. シャウプは、リカードが思考し著述を行う際の習慣を次のように的確に特徴づけている。

リカードの知的エンジンが回りはじめるには、2種類の刺激が必要であった。つまり実践的に重要な経済問題と、注意を引きつける者たち——アダム・スミス、マルサス、セーや議会委員会とりわけイングランド銀行の理事たち——による誤ったまたは誤解された診断や処方が必要であった。（Shoup 1960: 25）。

たとえ後世から見てリカードの経済分析が時空を超えた抽象的性格を帯び政策論争から超然としているように見えたとしても、リカードの頭脳をつねづね刺激し始動させていたこうした論争の具体的文脈のなかに戻して彼の分析を理解する必要があるとシャウプは示唆しているのである。

それでもなお、リカードの死後、新しい時代の現実からみて「非現実的な仮定」とみなさざるを得なくなったリカードの想定や理論装置は少なくない。

たとえば、リカードは資本家階級と地主階級のあいだの階級対立とその解決（穀物法廃止）を重視したが、リカードが1823年に急死したあと1825年に最初の資本主義的恐慌が発生すると、資本家・労働者間の階級対立激化が誰の目にも明らかとなり、この処方箋は急速に説得力を失って「リカード学派解体」のひとつの要因となった。

実質賃金を一定とみるリカードの想定は、きわめて長期にわたって（歴史統計によればイングランドでは1200～1850年ごろまで）現実と合致しており、理論的な仮定として妥当性があった。しかし、イングランドの労働者の実質賃金は1860年代ごろから急激な上昇を示すようになり、これは現実と適合する仮定ではなくなった（Clark 2003: 29, Figure 1）。

自然価格や貿易フローが変化するプロセスを説明する際にリカードが依拠した貴金属の分配という理論装置はのちに通貨学派に受け継がれたが、1870年ごろ国際金本位制と中央銀行政策が作動しはじめると、その非現実性をK. マルクスによって痛烈に批判されることになった。³⁶

ここで問題にしたいのは、以上のような、リカードの著述のスタイルに見られる「抽象的」性格とか、個々の理論装置や仮定が現実と合致していなかった、あるいは合致しなくなったという意味での「非現実的な仮定」ではない。

ミル父子によって行われた貿易理論における分析構図の「事前的視点」への転換がワルラスの「ab ovo の構成」に道を開いたとすれば、この転換以前にリカード自身がどのような分析構図を採用していたかが重要な問題として浮上するのである。ファッカロロが指摘したリカードの「事後的アプローチ」は、『原理』第7章の「4つの数字」の箇所でのみ採用されたのではなく、少なくとも『原理』全体を通じて採用されていたと考えられる。

〈「貿易前」→「貿易開始後」〉という「事前的視点」にもとづき、アウトルキーにおける与件（労働投入係数・生産要素の存在量・相互需要）から一挙に貿易状況を再構成する分析構図を創り出したミル父子と異なり、『原理』におけるリカードの外国貿易にかんする叙述は時間因果から離れることはない。その意味でリカードは今日で言う「過

36 「金の現在量の変動は国内の流通手段量を増やしたり減らしたりするので、それはこの国のなかでは商品価値を高くしたり安くしたりするにちがいないということは、じっさい言い古されたごまかし文句である。金が輸出されれば、この通貨主義によれば、金が入っていく国では商品価格が上がらなければならない。したがって、金輸出国の輸出品の価値は金輸入国の市場では上がらなければならない。反対に、金輸入国の輸出品の価値は、金輸出国の市場では下がるであろうが、金が入ってくるその商品の原産国では上がることになるであろう。ところが、実際には、金量の減少はただ利子率を高くするだけであり、金量の増加はただ利子率を低くするだけである。そして、このような利子率の変動が費用価格の確定または需要供給の決定にさいして計算に入らないとすれば、このような変動は商品価格には少しも影響しないことになるであろう」（Marx [1894] 1964: 567）。

程分析」と同様の分析構図を志向していたと言える。リカードが採用した分析構図を明確に示しているのが次の一節である。

そうしてみると、外国貿易というものは、制限されていようと、奨励されていようと、それとも自由であろうと、種々異なった諸国における生産の比較的困難のいかんにかかわらず、つねに継続されるであろう、ただそれを規制できるのは、それらの国で諸商品が生産されうるその自然価値ではなくてその自然価格を変更することによってだけである、そしてこのことは、貴金属の分配が変更されることによってもたらされる。この説明は、商品の輸入または輸出にたいする租税、奨励金または禁止であって、貴金属の異なった分配を引き起こさないものではなく、またそれゆえに、どこでも諸商品の自然価格と市場価格の両者を変更させないものはないという、私が他の箇所ですべての意見を、確証するものである。（*Works I: 343*, 強調引用者³⁷）

ここでリカードは、貿易が「つねに継続される」と論じ、時間のなかでの事態の展開（「過程」）を分析する姿勢を示している。そこで分析されるのは、租税や貿易政策といった攪乱要因が貴金属の分配の変更をもたらす、それによって各国の貨幣価値が変化することを通じて自然価格（および市場価格）が変化し、その価格変化がさらに貿易フローを変化させるという時間因果のなかでの一連のプロセスである。自然価格が分析の鍵となっているのは、ファッカレロが指摘したように（Faccarello [2015] 2017）、リカードが国内取引・国際取引をとわず「商業上のあらゆる取引は独立の取引」（*Works I: 138*）であり、またあらゆる取引は貨幣的取引であると考えているからである。つまり国内取引と同様に貿易においても、個別主体が自己利益にもとづき貨幣的な取引を行っている。価格は競争によって比較的短い時間内に自然価格、つまり生産原価に一般的な利潤を上乗せした価格に落ち着く。また自然価格は貴金属分配の変更による貨幣価値

37 「貿易前」を想定する「事前的視点（ex-ante perspective）」ないし「ab ovo の構成」にもとづく経済理論に熟練した人ほど、『原理』の次のような一節を読むと、リカードがあたかも〈「閉鎖経済」→「開放経済への移行」〉という分析構図を採用しているかのように誤解するかもしれない。実際にはリカードは連続した時間因果のなかでイングランドにおける穀物輸入禁止と輸入禁止解除を論じているのであって、しかもそこで貿易を行っている主体はイングランドやフランスという国ではなく個別の業者である（そうでなければ自然価格が成立しない）。

「もしも穀物の輸入がイングランドで禁止されるならば、その自然価格はイングランドで1クォータにつき6ポンドに騰貴するかもしれないが、それにたいしてフランスではその半値にすぎないということになる。もしもこのときに輸入の禁止が解除されるならば、穀物は、イングランド市場において、6ポンドと3ポンドの中間の価格にではなくて、究極的かつ永続的には、フランスの自然価格、すなわち、穀物をイングランド市場に供給し、そしてフランスでの資本の普通かつ通常の利潤を与える価格に、下落するであろう、そしてそれは、イングランドが10万クォータを消費しようとする、あるいは100万クォータを消費しようとする、この価格のまま続くであろう」（*Works I: 374-375*）。

の変化によって変動する。時間因果のなかで行動する個別主体は、それぞれがもつ経験や知識にもとづいて状況に対応しながら (ほぼ) 定型行動を反覆するだけである。リカードが想定する経済主体は、「ab ovo の構成」において白紙から一挙に経済を再構成するための「無限の視野・合理性・働きかけを有する合理的経済人」である必要はない。したがって、リカードが採用した貴金属分配という理論装置は「非現実的」であるものの、リカードの分析構図自体は「現実的」なものであると言える。

私たちは「ab ovo の構成」の知的支配から脱却したときにはじめて、経済を時間因果のなかで進行する過程として分析した古典派経済学の健全さを再発見できるのではないか。

VI むすびにかえて

本稿は近年のリカード貿易理論研究の発展を「4つの数字」の魔力から脱却する営為と捉え、その観点から論争を整理した。

J. ミルは、『原理』第7章の「4つの数字」の箇所にもっぱら注目してリカードの貿易理論の教科書的整序を試み、設例による説明を行なう際に分析構図を「事前の視点」に変更した。J. S. ミルは J. ミルから「事前の視点」に変更された「4つの数字」(2国2財)の設例を継承し、そこに交易条件決定理論として相互需要説を付け加えた。こうして確立された標準的理論は、「貿易前」の状況においては貿易パターンも交易条件も未決定であり、「比較優位の原理」によって貿易パターンが決定され、相互需要によって交易条件と貿易利益の配分が決定されるというものであった。

ミル父子によって転換された貿易理論は、のちの新古典派による「純粋交換経済」(価格調節の理論)に道を開いたばかりでなく、「純粋交換経済」の理論を支える思考様式である「ab ovo の構成」の起源(少なくともそのひとつ)にもなった。ミル父子は「事前の視点」へと分析構図を転換することによって、現在の貿易状況をそのたびごとに自給自足の状態から再構築することで交易条件(国際価値)がどこに決まるかを分析する理論を創り出した。ミル父子による視点の転換がひとつの起点となって「ab ovo の構成」が形づくられ、経済学は、経済状態が前の経済状態からどう変化するかを分析する理論から、そのたびごとに白紙の状態から価格がどこに決まるのかを分析する理論へと変化したのである。

新古典派経済学の純粋交換の理論は、無限の視野・計算・働きかけを有する合理的経済人を想定し、価格調節のもとで「もっと売るための行動(営業・マーケティング活動)」を必要としない非現実的な企業像を打ち立てた。このことは、サイモンが警鐘を鳴らしたように、主流派経済学と経営学など社会科学の隣接諸分野のあいだに亀裂と対

立を生みだした。

貿易理論が「4つの数字」の魔力に囚われつづけたために、貿易理論の進歩が妨げられたばかりでなく、経済学全体の進路が歪められ、ひいては社会科学の他分野にまで悪影響を及ぼす結果となった。

長らく経済学を支配してきた「4つの数字」に象徴される理論的枠組みから脱却することが求められている。

「長いあいだ深淵を覗きこむとき、深淵もまたこちらを覗きこんでいる」

——ニーチェ『善悪の彼岸』146節

参考文献

- [Anon.] (1814) *Considerations on the Importation of Foreign Corn; Arising out of the Proceedings, at a Meeting of the Heritors of Fiesher, Proposing to Petition the Legislature for Further Restriction, as Published in the Courier Newspaper of 10th Dec. 1813*, London: [Printed for the Author].
- 馬場宏二 (2005) 『もう一つの経済学——批判と好奇心』御茶の水書房。
- 馬場宏二 (2008) 『経済学古典探索——批判と好奇心』御茶の水書房。
- Barone, Enrico (1908) *Principi di economia Politica*, Rome: Tipografia Nazionale Bertero.
- Chipman, John S. (1965) A Survey of the Theory of International Trade Part 1: The Classical Theory, *Econometrica*, Vol.33, No.3: 477-519.
- Clark, Gregory (2003) The Condition of the Working-Class in England, 1200-2000: Magna Carta to Tony Blair, *Working Paper* (Department of Economics, University of California, Davis). <https://pdfs.semanticscholar.org/f3ab/f9c4411430bd3cdaf85adca447e4acf70dc9.pdf>
- Faccarello, Gilbert ([2015] 2017) A Calm Investigation into Mr Ricardo's Principles of International Trade, *The European Journal of the History of Economic Thought*, 22(5): 754-790. Also published as Chapter 6 in Senga *et al.* eds. (2017).
- Faccarello, Gilbert (2022 a) "I profess to have made no discovery". James Mill on Comparative Advantage, *The European Journal of the History of Economic Thought*, 29(1): 61-81.
- Faccarello, Gilbert (2022 b) 'Every transaction in commerce is an independent transaction'. Ricardo on Foreign Trade, forthcoming in John E. King (ed.), *The Anthem Companion to David Ricardo*, London and New York: Anthem Press. (forthcoming)
- Graham, Frank D. (1948) *The Theory of International Values*, Princeton: Princeton University Press.
- Haberler, Gottfried ([1930] 1985) Die Theorie Der Komparativen Kosten Und Ihre Auswertung Für Die Begründung Des Freihandels, *Weltwirtschaftliches Archiv* 32: 349-370 [English translation entitled 'The Theory of Comparative Advantage and Its Use in the Defence of Free Trade', in Selected Essays of Gottfried Haberler, edited by A. Y. C. Koo, Cambridge, MA: The MIT Press: 3-19].
- Haberler, Gottfried (1933) *Der Internationale Handel*, Berlin: Verlag von Julius Springer. (G. ハーバラー著、松井清・岡倉伯士訳『国際貿易論』有斐閣、1937年)。
- Haberler, Gottfried (1936) *The Theory of International Trade with its Application to Commercial Policy*, London: William Hodge.
- Hicks, John (1975) The Scope and Status of Welfare Economics, *Oxford Economic Papers*, New Series, 27(3): 307-326.
- 久松太郎 (2016) 「デイヴィッド・リカードと『比較優位の原理』——先駆者とその後の展開」『国民経

- 済学雑誌』第214巻・第4号, 81-99。
- Hisamatsu, Taro (2016) Constructing a Myth that Ricardo Was the Father of the Ricardian Model of International Trade: A Reconsideration of Torrens' Principles of Comparative Advantage and Gain-from-trade, *Discussion Paper* No.1630, Graduate School of Economics Kobe University, 1-15.
- 久松太郎 (2022) 「比較優位と貿易利益——ジェームズ・ミルとウィリアム・エリス」『同志社商学』第74巻・第1号, 71-109。
- Hollander, Samuel (1979) *The Economics of David Ricardo*, Toronto: University of Toronto Press. (S・ホランダ著／菱山泉・山下博監訳『リカードの経済学』(上・下) 日本経済評論社, 1998年)。
- Irwin, Douglas A. (1996) *Against the Tide: An Intellectual History of Free Trade*, Princeton: Princeton University Press (ダグラス・A・アーウィン著／小島清監修・麻田四郎訳『自由貿易理論史——潮流に抗して』文眞堂, 1999年)。
- Jones, W. Ronald (2010) Production Possibilities Frontiers, in Blaug, Mark and Peter Loyed eds., *Famous Figures and Diagrams in Economics*, Cheltenham and Northampton: Edward Elgar.
- 小島清 (1952) 『国際経済理論の研究』東洋経済新報社。
- Lavoie, Mark (2022) *Post Keynesian Economics: New Foundations*, Second Edition, Cheltenham and Northampton: Edward Elgar.
- Maneschi, Andrea (1998) *Comparative Advantage in International Trade: A Historical Perspective*, Cheltenham and Northampton: Edward Elgar.
- Maneschi, Andrea (2004) The True Meaning of Ricardo's Four Magic Numbers, *Journal of International Economics*, 62: 433-443.
- Maneschi, Andrea (2008) How Would David Ricardo Have Taught the Principle of Comparative Advantage?, *Southern Economic Journal*, 74(4) : 1167-1176.
- Maneschi, Andrea and William O. Thweatt (1986) Barone's 1908 Representation of an Economy's Trade Equilibrium and the Gains from Trade, *Journal of International Economics*, 22: 375-382.
- Martyn, Henry (1701) *Considerations upon the East India Trade*, reprinted in McCulloch ed. (1856). Reissued in the title of *The Advantages of The East-India Trade to England*, 1720.
- Marx, Karl ([1894] 1964) *Das Kapital*, Dritter Band, Berlin: Diez Verlag, 1964. (カール・マルクス著, 岡崎次郎訳『資本論』第3巻, 国民文庫, 1972年)。
- 馬渡尚憲 (1990) 『経済学のメソドロジー——スミスからフリードマンまで』日本評論社。
- Mill, James (1818) Colony, *Encyclopaedia Britannica, Supplement to the 4th, 5th and 6th eds.*, reprinted in 1989, Tokyo: Meicho Fukyu Kai, Vol.3.
- Mill, James (1821) *Elements of Political Economy*, London: Baldwin, Cradock and Joy.
- Mill, James (1824) *Elements of Political Economy, Second Edition Revised and Corrected*, London: Baldwin, Cradock and Joy.
- Mill, James (1826) *Elements of Political Economy, Third Edition Revised and Corrected*, London: Baldwin, Cradock and Joy, reprinted in 1844, London: H. G. Bohn, and in 1965, New York: Augustus Kelley. (ジェームズ・ミル著／渡邊輝雄訳『経済学綱要』春秋社, 1948年)。
- Mill, John Stuart ([1844] 1967) *Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy*, London: John W. Parker, reprinted in *Collected Works of John Stuart Mill*, Vol.4. Toronto: Toronto University Press. (J. S. ミル著／杉原四郎・山下重一編『J. S. ミル初期著作集4』御茶の水書房, 1997年)。
- Mill, John Stuart ([1848-71] 1965) *Principles of Political Economy*, London: John W. Parker, reprinted in *Collected Works of John Stuart Mill*, Vols.2-3. Toronto: Toronto University Press. (J・S・ミル著／末永茂喜訳『経済学原理(1)~(5)』岩波文庫, 1959-1963年)。
- 森田桐郎 ([1977] 1988) 「古典派国際分業論再考」『経済学論集』(東京大学) 第43巻第3号, 森田編著 (1988) 所収。
- 森田桐郎編著 (1988) 『国際貿易の古典理論——リカードウ経済学・貿易理論入門』同文館。

- 根岸隆（2000）「国際貿易理論史上の二問題」『経済学史学会年報』38, 59-65。
- Robbins, Lionel（1958）*Robert Torrens and the Evolution of Classical Economics*, London: Macmillan.
- Ruffin, Roy（2002）David Ricardo's Discovery of Comparative Advantage, *History of Political Economy*, 34（4）: 727-748.
- Ruffin, Roy（2005）Debunking a Myth: Torrens on Comparative Advantage, *History of Political Economy*, 37（4）: 711-722.
- Ricardo, David（1951-1973）*The Works and Correspondence of David Ricardo*, 11 vols., edited by Piero Sraffa with the collaboration of M. H. Dobb. Cambridge: Cambridge University Press.
- Samuelson, Paul A.（1948）*Economics: An Introductory Analysis*. New York: McGraw-Hill.
- Samuelson, Paul A.（〔1969〕1972）The Way of an Economist, in Paul A. Samuelson ed., *International Economic Relations*, London: Macmillan, reprinted in Robert C. Merton ed., *The Collected Scientific Papers of Paul A. Samuelson, Vol.III*, Cambridge, MA.: The MIT Press.（塩野谷祐一ほか訳『サミュエルソン経済学体系第9巻 リカード、マルクス、ケインズ……』勁草書房, 1979年）。
- Samuelson, Paul A.（〔1976〕1979）Ilogic of Neo-Marxian Doctrine of Unequal Exchange, in P. A. Besley, E. J. Kane, Paul A. Samuelson and Robert M. Solow eds., *Inflation, Trade and Taxes: Essays in Honor of Alice Bourneuf*, Columbus: Ohio State University Press, reprinted in Hiroaki Nagatani and Kate Crowley eds., *The Collected Scientific Papers of Paul A. Samuelson, Vol.4*, Cambridge, MA.: The MIT Press.
- Sato, Hideo（2021）Graham's Theory of International Values Revisited: A Ricardian Trade Model with Link Commodities, *Journal of the History of Economic Thought*, 43（2）: 193-218.
- 佐藤秀夫（2021）「貿易理論史の中の連結財——リカード型貿易モデルの対立軸」『福岡大学商学論叢』66（2-3）, 185-213。
- Schumpeter, Joseph A.（〔1912〕2006）*Theorie der Wirtschaftlichen Entwicklung*, Berlin: Duncker & Humbolt.（J. A. シュンペーター著／八木紀一郎・荒木詳二訳『経済発展の理論（初版）』日本経済評論社, 2020年）。
- Schumpeter, Joseph A.（1926）*Theorie der Wirtschaftlichen Entwicklung*, München: Duncker & Humbolt.（シムペーター著／塩野谷祐一・中山伊知郎・東畑精一郎訳『経済発展の理論』（上・下）岩波文庫, 1977年）。
- Schumpeter, Joseph A.（〔1934〕2021）*The Theory of Economic Development*, London and New York: Routledge.
- Schumpeter, Joseph A.（〔1943〕1994）*Capitalism, Socialism and Democracy*, New in paperback, London and New York: Routledge.（J. A. シュンペーター著／中山伊知郎・東畑精一訳『資本主義・社会主義・民主主義（上・中・下）』岩波書店, 1962年）。
- Schumpeter, Joseph A.（〔1954〕1994）*History of Economic Analysis*, London and New York: Routledge.（J. A. シュンペーター著／東畑精一・福岡正夫訳『経済分析の歴史（上・中・下）』岩波書店, 2005-2006年）。
- Seligman, Edwin R. A.（1911）Ricardo and Torrens, *Economic Journal* 21: 448-55.
- Senga, Shigeyoshi, Masatomi Fujimoto and Taichi Tabuchi eds.（2017）*Ricardo and International Trade*, London: Routledge.
- 塩沢由典（1990）『市場の秩序学』筑摩書房。
- 塩沢由典（1997）『複雑さの帰結——複雑系経済学試論』NTT出版。
- 塩沢由典（1998）「『帰結』批評への応答／複雑さの問題はいかに受け取られたか」『経済学雑誌』第98巻第5・6号, 63-123。
- 塩沢由典（1999）「当事者視点の導入は、経済学をどこに導くか——植村高久『制度と資本』の大構想をめぐって」『経済学論集』（東京大学）65（1）, 71-93。
- 塩沢由典（2004）「複雑系経済学の現在」, 塩沢由典編著『経済学の現在1』日本経済評論社, 所収。
- 塩沢由典（2014）『リカード貿易問題の最終解決——国際価値論の復権』岩波書店。

- Shiozawa, Yoshinori (2017 a) The New Theory of International Values: An Overview, in Shiozawa *et al.* eds. (2017).
- Shiozawa, Yoshinori (2017 b) An Origin of the Neoclassical Revolution: Mill's 'Reversion' and its Consequences, in Shiozawa *et al.* eds. (2017).
- Shiozawa, Yoshinori (2019) A Large Economic System with Minimally Rational Agents, in Shiozawa *et al.*, (2019) : 53-138.
- Shiozawa, Yoshinori, Toshihiro Oka and Taichi Tabuchi eds. (2017) *A New Construction of Ricardian Theory of International Values: Analytical and Historical Approach*, Singapore: Springer.
- Shiozawa, Yoshinori, Masashi Morioka, and Kazuhisa Taniguchi (2019) *Microfoundations of Evolutionary Economics*, Tokyo: Springer.
- Shoup, Cari S. (1960) *Ricardo on Taxation*, New York: Columbia University Press.
- Sidgwick, Henry ([1901] 1968) *The Principles of Political Economy*, Third Edition, Rome: Edizioni Bizzarri.
- Simon, Herbert A. (1991) Organization and Markets, *Journal of Economic Perspectives*, 6(2): 25-44.
- Simon, Herbert A. (1997) *Administrative Behavior: A Study of Decision-Making Processes in Administrative Organizations*, Fourth Edition, New York: The Free Press. (ハーバート・A・サイモン著／二村敏子他訳『経営行動——経営組織における意志決定過程の研究』ダイヤモンド社, 2009年)。
- Sraffa, Piero (1926) The Law of Returns under Competitive Conditions, *Economic Journal*, 36(144): 535-550.
- Sraffa, Piero (1930) An Alleged Correction of Ricardo, *Quarterly Journal of Economics*, 44: 539-545.
- Sturn, Richard (2015) Ricardian Equivalence, in Kurz, Heinz and Neri Salvadori eds., *The Elgar Companion to David Ricardo*, Cheltenham and Northampton: Edward Elgar: 449-455.
- 田淵太一 (2006) 『貿易・貨幣・権力——国際経済学批判』法政大学出版局。
- 田淵太一 (2010) 「リカードにおける『比較優位の原理』と労働価値説」『同志社大学商学部創立60周年記念論文集』, 245-255。
- 田淵太一 (2015) 「書評 塩沢由典著『リカード貿易問題の最終解決——国際価値論の復権』」『経済学雑誌』(大阪市立大学) 115(4), 69-72。
- Tabuchi, Taichi (2017 a) Comparative Advantage in the Light of the Old Value Theories, in Shiozawa *et al.* eds. (2017): 265-280.
- Tabuchi, Taichi (2017 b) Yukizawa's Interpretation of Ricardo's 'Theory of Comparative Costs', in Senga *et al.* eds. (2017: 48-59).
- Tabuchi, Taichi (2018) Ricardo's Theory of Value and International Trade: On the Invalidity of the Alleged 'Labour Theory of Value, 『経済学史研究』第60巻第1号, 79-99。
- 田淵太一 (2020) 「国際価値をめぐるシーニア・トレンズ論争の意義——Catalactics への転換」『同志社商学』第71巻5号 (同志社大学商学部創立70周年記念論文集), 129-144。
- 田淵太一 (2022) 「N. シーニアの貨幣論と国際価値論」『高崎経済大学論集』第64巻・第2号 (岡田和彦教授退職記念号), 45-57。
- Tabuchi, Taichi (2022) N. Senior on Money and International Values, Paper prepared for the 25th Annual Conference of the European Society for the History of Economic Thought, Padova, the University of Padova, 9-11 June.
- 田淵太一・久松太郎 (2018) 「リカードはリカード・モデルを提示したのか」『国際経済』第69巻 (日本国際経済学会研究年報「比較優位論の現代的意義: 『経済学および課税の原理』出版200年記念」), 1-30。
- Tabuchi, Taichi and Taro Hisamatsu (2022) International Trade, in *Routledge Historical Resources, History of Economic Thought* (History of Economic Thought) DOI:10.4324/9781138201521-HET24-1, 1-11.
- Thweatt, William O. (1976) James Mill and the Early Development of Comparative Advantage, *History of Political Economy*, 8: 207-234.
- Thweatt, William O. (1987) James and John Mill on Comparative Advantage: Sraffa's Account Corrected, in H.

- Visser and E. Schoorl eds., *Trade in Transit*, Dordrecht: Martinus Nijhoff.
- Viner, Jacob ([1937] 1955) *Studies in the Theory of International Trade*. Reprinted in 1955. London: George Allen & Unwin. (ジェイコブ・ヴァイナー著／中澤進一訳『国際貿易の理論』勁草書房, 2010年)。
- 若松直幸 (2017) 「リカードウ『原理』第29章における公債制度論」『経済学史研究』第59巻第1号, 43-62。
- 安井琢磨 (1979) 『経済学とその周辺』木鐸社。
- 吉信肅 (1991) 『古典派貿易理論の展開』同文館。
- 行沢健三 ([1974] 1988) 「リカードウ『比較生産費説』の原型理解と変型理解」『商学論纂』(中央大学) 第15巻第6号, 森田桐郎編著 (1988) 所収。
- 行沢健三 (1978) 「古典派貿易理論の形成——リカードウとミル父子」行沢健三・平井俊彦・出口勇蔵編, 出口勇蔵古希記念論文集『社会科学の方法と歴史』ミネルヴァ書房, 所収。